

【Don't excuse !】

角田 亘（国際医療福祉大学医学部 リハビリテーション医学教室 主任教授）

* 2022 年に某誌に発表したものを、一部改訂した。

私の父は昭和一桁の生まれで厳しい人であるので、一緒に暮らしていた頃（私が高校を卒業するまで、父がおよそ 50 歳になるまで）は、細かいことで私はよく怒られた。さらに、それについて私が言い訳をすると、ほとんどの場合で父の怒りは増幅されて事態が泥沼化した。しかしながら、当時の父の年齢を超えてしまった私は今になって強く思う、やはり言い訳は絶対によくない。

人に仕事を頼んだり課題を与えたりして、それが期日までに達成されなかった場合もしくはその完成度が低かった場合、言い訳をする人は私の周りでも珍しくない。言い訳の多くは「忙しかった」もしくは「時間がなかった」である。ただし、ここで考えてみると「忙しい」、「時間がない」の判断基準が、どうも個人間で異なる。ある人は「30 分間の残業が週に 1 回ある」と忙しいと言い、またある人は「8 時間しか眠れない夜が 3 日続いている」と時間がないと言う。しかしながら、連日で 21 時過ぎまで文句を言わずに働いている人もいるし、毎日 5 時間睡眠で黙々と頑張っている人もいる。なんとなくの私の印象であるが（あくまでも、一個人のきわめて不確かな印象に過ぎないが）、自らの限界まで頑張っている人と比べると、余力を残して毎日を過ごしている人のほうが、言い訳をする確率が高いように思う。昭和から平成への転換期（いわゆる古い時代）に医師としての教育（社会人教育）を受けた私は「そんなに寝る暇があるのなら、もうちょっと仕事に・・・」と思ったりもするのだが、××ハラスメントという語が飛び交う現在では、そんな言葉を口にするのはご法度中のご法度である。

一方で、言い訳を聞くことが減多にない舞台がある。それは夏の高校野球、甲子園大会の敗者へのインタビューだ。「打線に疲れがあったのですか？」とか「投手が打たれたのは肩の痛みが原因ですか？」などと問われた敗軍の将やエースの多くは、言い訳をするどころかそのような弁明を否定する。なぜだろうか？それは、彼らにとっては「試合に勝つ」という目標の達成が全てであり、自分たちにハンデがあれば（それを言い訳するなどというのはもってのほかで）是が非でもそのハンデを克服せんと闘志を奮い立たせてきているからだ。確固たる夢や目標があり、そのために毎日を全力で生きている人間には、道半ばで遭遇するハンデ・障害・不利な環境を「言い訳する」という感覚は生じないのであろう。彼らは、ハンデ・障害・不利な環境を克服できなかったことがただ悔しい、それによって夢がかなわなかったことがただ悔しいのである。言い訳とは無縁の姿勢で、とにかく夢・目標の達成に向かって突き進む人たちの姿は（結果はどうであれ）とても美しく、こちらの心まで清められる。これは、スポーツの世界には限らない。

そうは言っても私は、最近流行りの「ワーク・ライフ・バランス」という言葉の大切さも、それなりに理解している。もちろん「患者への献身」が求められる医師であっても、仕事が全てであるとは思わない。趣味や娯楽に時間を費やしても別にかまわないし、ましてや母と妻と医師を兼ねる女医先生であれば「家事と子育て」が仕事と同等（もしくはそれ以上）に大切となることもある。ただし、ここでお願いしたいことは、ワーク・ライフ・バランスを選んだ人は、それによって生じるデメリットを言い訳してほしくない。少なくとも、昭和の時代と変わらず仕事一途に生きる不器用な医師に対して「あいつは仕事人間だから、あれくらいの業績をあげるのは当然だ」とか「俺だって仕事に全力を注いだら、あいつくらいのことはできる」などと言った言葉は口にしないでいただきたいと思う。

私は、ある人が成し遂げる業績の大きさは「才能・能力×費やした時間」で決定されると思う。そして、音楽家や芸術家では「才能・能力」の幅が大きく、「才能・能力」が少ない人が大成することは少ないように感じている。しかし、医療・医学の道はそうではなさそうだ。つまり、医療者・医学者たるもの「才能・能力」の幅は実はそれほど大きくはなく（個人差がなく）、むしろある仕事に費やした時間が大きい人ほど（その仕事により多くの熱意を注いだ人ほど）大成するように思う。もう少し露骨に言うと、医療・医学の道においては、「忙しい、時間がない」と自らに逃げ道・退路を与えるような人はダメであり、ワーク・ライフ・バランスという言葉に惑わされることなく目標に向かって無骨に突き進んだ医療者・医学者ほど、偉業を成し遂げる可能性が高いはずである。異論があるのを承知で言うが、ワーク・ライフ・バランスという新語の登場は少なからずの若き医療者・医学者に「言い訳」の余地を与え、彼らの「無限の将来性」を「有限の将来性」にしてしまったと思う。

余談ではあるが、大阪に住む私の知人は BMI が非常に高値であるのだが、飲み会になるといつも「明日からダイエットや！今日は最後の晩餐やでえ」と言いながらバク食いバク飲みをしている。そしてたまに会うと、いつも間違いなく少しずつ体が大きくなってきている。こんな人はなんと言うかその・・・、まあ、言い訳以前の問

題なのであろう。

実は、ゴルフ場というのは、多くの言い訳を耳にする場である。私の先輩医師がティーショットを放つと、ボールは右へと曲がり行き、池の中へとポチャリと落ちた。彼は3人の同伴者に向かって「クラブ握るの、実は3か月ぶりなんだ」、「黙っていたけどさ、先週から肩がとても痛いんだ」と口にする。続いてティーグラウンドに立った私は、そんな言い訳の連発を耳にして、少タイライラとさせられたままで二度三度素振りをする。そしていざ本番とスイングしたところ、イラッと乱れた心から不覚にも力が入りすぎ、私のボールは“先輩医師がボールを打ち込んだ池のはるかに右にまで”超高速で消えていった。するとその先輩は嬉しそうに私を見て「別に付き合ってくれなくてもいいのに」と言う。この日のラウンドのために打ちっぱなし練習場に何度も通ってきた私としては、世の無常を恨むのみであった。そんな時私は、かの連合艦隊司令長官であった山本五十六の名言「男の修行」を思い出すようにしている。すなわち、「苦しいこともあるだろう。云い度いこともあるだろう。不満なこともあるだろう。腹の立つこともあるだろう。泣き度いこともあるだろう。これらをじっとこらえてゆくのが男の修行である」というあの言葉だ。

先日、家内が作ってくれたカレーライスがあまりにも美味しくて、私はおかわりをねだった。それを聞いた中三の娘が「ババって今、ダイエット中じゃなかったの」と言って冷笑した。少々解釈が飛躍するが、これも男の修行だと判断した私は、黙ったままで二杯目のカレーライスをきれいに残さずに食べきった。長い人生たるもの、いろいろとすっきりしないことがある。

(終わり)